令和４年度 山口・吉南医師会女性医師部会合同研修会報告

竹本　成子

2023年１月28日18時から山口市医師会大会議室に於いて、山口・吉南女性医師部会の合同研修会が開催されました。参加者は山口市医師会から 18名、（男性７名、女性11名）、吉南医師会から５名（男性１名、女性４名）の合計23名でした。このうちzoomでの参加は５名でした。

今回の研修会は、山口県立美術館学芸監の荏開津通彦氏をお招きし、雪舟についてお話しいただくことになりました。

開会にあたり、國近尚美部会長から「新型コロナ感染症第８波もやや収束に向かいつつありますが、この度も、現地参加では厳重に感染対策を講じつつ開催することになりました。今回も懇親会は中止ですが、お弁当をお申込の方には、雪舟ゆかりの地産の日本酒をご用意しております。」との挨拶がありました。また、成重隆博会長からは、「学芸員」とは学識のみならず、経験も備える必要のある難関の資格であることをご紹介いただき、「直接お話を伺えるのはまたとない機会で、本日の講義を楽しみにしてまいりました」とご挨拶いただきました。

レクチャー

「キュレーター（学芸員）に聞く！　雪舟」

講師　山口県立美術館学芸監

荏開津　通彦　氏

講師の荏開津通彦氏は、1966年東京のご出身とのことでしたが、そのお珍しいお名前のルーツはお父様の出身地の岐阜にあるとのお話でした。東京大学文学部美術史学科をご卒業後、東京大学大学院や幾つかの美術館でご研鑽を積まれ、2000年から山口県立美術館に学芸専門監としてご勤務されています。

先生のご専門は、日本中世美術史で、特に室町時代の水墨画を研究なさっておられます。現在も雪舟に関する多数の論文発表や山口県立美術館での企画展などでご活躍です。

2017年、長らく行方不明であった雪舟の真筆が84年ぶりに発見された時、山口県立美術館でお披露目の展覧会があったことをご記憶の方も多いかと思います。先生は、この『倣夏珪山水図』の発見、鑑定の際にも深く関わっておられました。

雪舟は室町時代に活躍した水墨画家であり、禅僧です。山口市民には雪舟庭でお馴染み感がありますが、彼の作品は日本絵画で最多６点も国宝に認定されており、日本絵画史上別格と言える偉大な画家です。

雪舟について８つのポイントについて解説をしていただきました。（以下の番号は荏開津先生のレジメの番号とタイトルです。）

①　拙宗・雪舟同人物説（雪舟の名前）

「雪舟」は号で、諱は「等楊」、「雪舟等楊」と称されています。

江戸期の画家伝には「雪舟等楊」とよく似た画風の「拙宗等揚」という別の画家がいると記されていました。最近の研究で、両者の活躍時期が重複しないことと画風の比較から、拙宗・雪舟同人物説が定説になっています。つまり、雪舟等楊は若い頃には拙宗等揚と名乗っており、長禄元年（1457年）に改号し雪舟等楊と号するようになったのです。さらに荏開津先生によると、法諱（僧の戸籍のようなもの）は「等揚」で、こちらは終世変わっていないそうです。

今後、雪舟画の鑑賞の際は、落款にも注目ですね。

②　雪舟の師

雪舟は、応永27年(1420)に備中国赤浜（現：岡山県総社市）に生まれ、臨済宗聖一派の宝福寺に入り、僧としての修行が始まりました。涙で床にネズミの絵を描いた伝説がこの頃のことです。絵の才能を認められたためか、京都に移り、相国寺で画僧・天章周文に絵を学んだとされています。周文は足利義則お抱えの画家で、当代の第一人者でした。

③　入明による画風の転換

享徳３年(1454)ごろ、京都から周防国山口に移ってまいりました。なぜ？当時の文化の中心「明」に渡りたかった雪舟は、（遣明使を組織できる）勢力のある大内氏に近づきチャンスを得ようとしたためです。大内氏の御用絵師となった雪舟は、応仁１年(1467)に大内氏の遣明使に随行し念願の明へ渡り、２年間中国絵画を学びました。入明中、雪舟は北京礼部院の壁画を作成しました。国宝『四季山水図』はこの頃の作品です。

雪舟が明に渡ったその年、日本では応仁の乱が始まり、大内政弘は西軍として参戦しました。応仁の乱は10年にわたって続きました。

文明１年(1469)６月ごろ明から帰国の途についた雪舟でしたが、以後の10年間は所在が不明だったそうです。応仁の乱の余波で捕らえられていた可能性があったようです。文明９年（1477）に応仁の乱が終わると、文明11年に石見国の武将の肖像画を描いていたことが分かっています。

文明18年は、雪舟にとって記念碑的な作品『観音変相図』『山水長巻』『大内政弘邸障壁画』が描かれました。

同じ年は大内政弘にとっても特別な年でした。６月に政弘の父、故大内教弘に従三位が追贈され、10月には勅願寺化された大内氏の氏寺・興隆寺に大内氏の家譜が奉納されました。これらの出来事は、応仁の乱の際、足利義政によって毀損された、大内教弘・政弘の家督の正当性を回復するために重要な意味を持つものでした。

『観音変相図』『山水長巻』『大内政弘邸障壁画』はこの特別な出来事を盛大に祝うために作成されたと思われています。

④　幻の大作『観音変相図』

現在は所在不明ですが、大内政弘が亡父・教弘を追善供養するために造像したとされています。

⑤　『山水長巻』は何のために作られたか

足利将軍家に所蔵されていた中国・南宋時代の画家である夏珪の「山水図巻」には、統治者としての政治権力を象徴する＜皇帝の絵画＞という特別な意味が与えられていました。雪舟の『山水長巻』はこれと同様に国家を守護する治世者としての大内政弘に献上されたものと推定されています。

また、大内政弘が自邸の襖絵を雪舟らに依頼しました。足利将軍邸「四季山水図襖絵」に倣って作成されたと考えられており、雪舟の『山水長巻』はこの襖絵のための画本＝絵手本であった可能性があります。

⑥　雪舟画の逸脱について『秋冬山水図』

『秋冬山水図』のうちの『冬景山水図』には「抽象」という概念なしには説明できないような特徴があります。

⑦　『破墨山水図』弟子に与えた自叙伝

雪舟の元で修行を終え帰郷する弟子・宗淵に請われ、書き与えた作品です。画には自賛が添えられており、「自分は昔明に渡り、画師を求めたが、秀でた者はほとんどいなかった。名声を博していた李在と張有声に『設色の旨』と『破墨の法』を学んだ。日本に帰ってきて、改めて自分の祖である如拙・周文先生の偉大さを痛感した。」と記されています。

⑧　雪舟スパイ説

雪舟は転居も含めて旅の多い人生を送っています。旅した場所の風景画を描くことでその地の地理情報、往来の様子や港や川といった交通事情の様子を知ることが可能で、パトロンである大内氏のために軍事的・政治的情報伝達者として活動していた可能性があると考えられています。

文明13年ごろには、美濃国、駿河国・相模国、越後・能登・加賀へと旅行しています。

文亀１年(1501)、なんと81歳の時には、丹後を訪れ『天橋立図』を描いています。その前年、明応の政変によって将軍位を追われた足利義材が、大内義興を頼って山口に下向していました。京都回復のた

めに日本海側の諸守護との連携工作が必要だったことと81歳の雪舟の旅が無関係であったとは考え難いと思われます。

以上の文献的考察についての解説の他にも、雪舟絵画の特徴についても都度お話しいただいきました。

荏開津先生の雪舟愛に溢れたお話によって、一枚の絵画の背景には、いろいろな物語や政治的な事情が存在していることがわかり、雪舟の水墨画についてじっくり鑑賞したくなる貴重な御講演でした。

時間の都合で、恒例の参加者全員の一言コメントは行いませんでしたが、初参加の青島真由先生から自己紹介をいただきました。

最後に、吉南医師会の榎美穂先生から「今年も無事に皆様のお顔を拝見できて嬉しい時間でした。今回の研修会も素晴らしい企画でした」とご挨拶があり、閉会となりました。

コロナ禍で感染対策のため今年も懇親会は中止となり、参加者同士の密な交流はできませんでした。しかし、美術館に出かけて行きたくなるような好奇心をくすぐられる有意義な研修会となりました。

この研修会では参加者の交流の場としての活動を継続していきたいと存じます。女性のみならず、男性の先生方にもどうぞ奮ってご参加くださいませ。